

「日本文化論」の出発点

——『民族学研究』（1950年5月号）の『菊と刀』特集を読む——

小澤 萬記
(人文学部人文学科)

On the Criticism of Ruth Benedict's *The Chrysanthemum and the Sword*

Kazunori Ozawa
(Department of Humanities, Faculty of Humanities and Economics)

1

「日本文化論」あるいは「日本人論」と呼ばれる、一連の議論がある。週刊誌の記事から学術雑誌の論文にいたる、このジャンルを明確に定義することは難しいが、その数が膨大なものとなることは疑いない。「明治から今日まで」と銘打たれた南博『日本人論』（1995年、岩波書店）では約500の「日本人論」「日本文化論」が言及されている。この期間に限定しても、南の本がすべてを網羅しているという訳ではない。もしも、明治以前まで含めるとすれば、この量は更に増えるはずである。

ところで、このような「日本文化論」に対しては、その学問的妥当性に疑問ないしは批判が加えられて来た。いわく、「日本文化論は現在の社会構造を正当化するためのフィクションである」（ウォルフレン）。「それはイデオロギーにすぎない」（ハルミ・ベフ）。「大衆消費財である」（ベフ）等々。これらの批判に、ある種の根拠が存在することは認めざるを得ない。「日本文化論」（「日本人論」）の多くが、方法や調査の点で厳密性を欠き、しばしばイデオロギーとして機能して来たことも事実であるからだ。

だが、そうであるとしてもこのような「日本文化論」について議論することが無意味であるとすることはできまい。まず、第一にこれらの「日本文化論」の現実的な妥当性について、当然のこととして学知のレベルで検討が加えられなければならない。同時に、それとは別の次元で、これらの言説は検討の対象となりうる。すなわち、論者の日本社会にたいする、あるいは日本文化に対するイメージの反映としてである。つまり、様々な「日本文化論」はそれが「現実の」日本社会の実態と合致しているかということとは当然問題になるにしても、そのことを離れて論それ自体の持つ意味や機能が考察の対象になり得るということである。それらの「論」自体が相互に干渉しあいながら、対象からは独立してある種の「関心のネットワーク」（サイド）を形成するプロセスを記述することは十分意味のあることである。このようにして、これらの言説を考えるに当たって、その系譜の出発点をどこに設定するかは重要な問題となり得る。

例えば第二次世界大戦後に展開された議論を完結したものとして考えるという視点を設定した場合、何が見えて来るだろうか。このような視点の設定が成功を収めたのが、青木保『日本文化論』

の変容』(中央公論社、1990)である。議論の系譜の出発点をどの様に設定するかという可能性は無限にあるのであって、第二次世界大戦は時代区分の出発点として論理的にはなんら特権性をもっている訳ではない。同書の設定が正当性をもち得るのは、「日本文化論」について議論することが優れて「現在」に拘わるテーマだからである⁷⁾。

『日本文化論』の変容』があきらかにする様に、第二次世界大戦の終結を出発点として「日本文化論」の流れを記述して行ったとき、その出発点に置かれるのがルース・ベネディクトの『菊と刀』であることは論を俟たない。その場合には、ベネディクトに続く一連の議論は、彼女の論の展開、批判、注釈として位置付けられることになる。「戦後」という時間枠において「日本文化」についてこのような完結した「関心のネットワーク」が『菊と刀』を軸として形成されて来たのである。⁸⁾

だが、「戦後」に展開されたこれらの議論を完結したものと見る観点は妥当ではあるが、それ以前の議論との連続性も否定できない。ここで検討したいのは、このような戦後の日本文化論の出発点においてそれ以前の議論との断絶と連続がどのようなものとして立ち現れ、どのようなものとして観念されたのか、という点である。

その場合の極めて重要な手掛かりとなるのは、『民族学研究』第14巻4号(1950年5月)の特集「ルース・ベネディクト『菊と刀』の興えるもの」である。『菊と刀』の原著が出版されたのが1946年、翻訳の出版が1948年であるから、この特集に寄せられた論文はこの本に対する最初期の反応であると言っている。⁹⁾またこの年は敗戦という「大破局」からわずか五年後の事であった。これらの論文はその後展開されるベネディクトの議論のヴァリエーションとしての「日本文化論」の論点を先取りしている。また、法社会学、心理学、社会学、哲学、民俗学の諸領域を代表する論文の書き手たちはそれぞれ、あるいは戦後の日本文化についての代表的な論者であり、あるいは戦前からそれに関して執筆活動を続けて来た人々であった。その意味において、ここには「日本文化論」に於ける連続と断絶の両面が明確に立ち現れているのである。¹⁰⁾

『民族学研究』の特集「ルース・ベネディクト『菊と刀』の興えるもの」は5つの書評論文からなっている。その著者と題目を以下列挙すると、川島武宜「評価と批判」、南博「社会心理学の立場から」、有賀喜左衛門「日本社会構造における階層制の問題」、和辻哲郎「科学的価値に対する疑問」、柳田国男「尋常人の人生観」である。

これらの5つの論文のうちベネディクトの論を最も高く評価しているのは川島であり、ほぼ全面的に否定しているのが和辻である。残りの3つの論文のベネディクトに対する評価は、ほぼその中間に位置付けられる。和辻論文を別にすれば、個々の論者はベネディクトに対して一方で批判的な要素を保持しながら全体として肯定的な立場を取るか、肯定的な要素を保持しながら全体として批判的な立場を取るかのいずれかである。ベネディクトに対する評価には方法に関する面と、内容に関する面の2つがある。まず方法に関しては、川島、柳田、有賀は評価、南は批判、また内容については川島、有賀は部分的に批判しながらも全体として評価、南、柳田は全体として批判的なスタンスをとっている。

『日本文化論』の変容』において青木保はこの特集に文化人類学者が一人も執筆者としてかわわっていないことを取り上げて、「当時の日本の文化人類学会の貧困を示すもの」¹¹⁾と批判したが、かならずしもそうとは言えないだろう。なぜなら、この特集全体に編集責任者であった石田英一郎の意図が働いているからである。この場合それぞれの論文の内容もさることながら、五つの論文が全体として一つのメッセージを伝えていることが重要である。すなわち、川島論文が総論として、全体の基調、すなわちベネディクトに対する肯定的評価を決定している。それに続く各論の中でどのようにベネディクトの方法や内容が批判されても、それは川島論文の「部分否定、総じて肯定」

という枠組みの中に回収されることになる。全面否定とも言える和辻の論にしてもその例外ではない。更に、柳田の批判的ではあっても否定的ではない論が、和辻論文に含まれるある種の敵意に対する中和剤の役割を果たしている。これは結果としてベネディクトの意義と価値を前面に押し出し、それに部分的な修正を加えて豊富化するという方向を指し示している。そして、これは既に述べた「戦後」の「日本文化論」の枠組みそのものであった。

以下、これらの論文を検討するに当たって、論者の年齢によって一本の線を引いてみる。つまり、主に戦後になってから執筆活動を始めた川島、南と戦前から言論活動を行っていた和辻、柳田を分けて考えるのである。⁶⁾ 両者の中間に入る有賀は、仮名づかい（柳田、和辻は旧かな）の点も考慮して戦後派に入れて論じる（ちなみに、1903年生まれの石田英一郎は、川島と有賀の中間の年齢である）。勿論この分け方は便宜的なものではあるが、本論文のテーマである戦前との連続と断絶の相を検討するのに一つの手掛かりを提供してくれるのではないだろうか。

2

法社会学者川島武宜は1909年生まれ、1932年東大法学部卒業後、助手、助教授をへて東大教授になったのは1945年である。1950年までの主な著書は『民法解釈学の諸問題』（49年）、『所有権法の理論』（49年）、『法社会学における法の存在構造』（50年）、『日本社会の家族的構成』（48年）などである。40代初めの川島はまさに、一方ではアカデミズムの世界で、他方ではオピニオンリーダーとして活躍を始めたところであった。さて、彼の「評価と批判」は次のような言葉で始まる

何よりもまず本書について言わなければならないことは、著者がまだ一度も日本に来たことがないのにかかわらず、これほど多くの、しかも重要な____一見したところごく些細な日常的なものであるにもかかわらず、ほんとうはきわめて重要な____事実を集め、しかもそれに基づいて日本人の精神生活と文化についてこれほど生き生きとした全体像を描き出し、且つこれを分析して、基本的な、全体に対して決定的な意味をもつような諸特徴を描き出したという、著者の全く驚くべき学問的能力についてである。⁷⁾

川島がこの研究を評価するのは第一にそのデータの豊富さであり、第二は理論的分析の深さ（構造的把握）である。具体的内容の点ではベネディクトの議論をほぼ章ごとに追いながら、その論理をたどり、それらの指摘や分析の適確さと価値を評価する。

かれの論理展開はほぼベネディクトの議論の評価であるが、何点かは疑問が提示されている。第一は「義務」「義理」の区別と、その両範疇への様々なObligationの分類が妥当性を欠くと言う点である。第二に「人情」及び「徳のディレンマ」の章に関して指摘されるのは、歴史性の欠如である。第三に「修養」については、ベネディクトのいう日本社会の特質はアジア社会に広く妥当するのではないかという事が批判される。

最後に、全体を総括して川島はベネディクトの方法に2つの点で批判を加える。第一は、既に指摘した歴史性の欠如であり、第二が「日本人」なる概念が均質なものとして措定されていて「日本人の中にある種々の階層や地方や職業からくる具体的な差異が殆ど無視されているように思われる」と言うことである。『菊と刀』についてしばしば言われる、著者が日本を知らない事から来る細部の間違いも言及されているから、川島の評は、全面肯定と言う訳ではない。むしろ、この本の欠点は殆ど上げられている。

1914年生まれの社会心理学者、南博は1940年京大哲学科卒業、1943年コーネル大大学院修了。帰

国したのは1943年で、実験心理学から社会心理学に転向したのは、帰国後の事である。1950年という年は一橋大学の助教授になった年であり、この前後から「思想の科学研究会」の活動も活発に展開するようになっていた。すなわち、この時点の南は大衆文化論やマス・コミュニケーションの分野に華々しく登場した所であった。

南の「社会心理学の立場から」は3つの部分に分けられる。1 方法について 2 <日本人>の概念について 3 日本人の<二重性格>についてである。1では、ベネディクトの方法がそれまでの日本社会に関する政治・経済学的研究及び歴史学研究の蓄積を無視している点、及びインタビューを行う際のサンプルの偏りが論じられる。この背景にはベネディクトの(ミードなどと比較した場合の)帰納的な論証スタイルがあると南は見る。つまり日本文化を「固定して」「型」として捕らえる彼女の方法に欠陥があるとするのである。即ち、方法論のレベルでは、南はベネディクトの所論にたいして全面的な否定を行っている。ところが、1の最後の段落において南は唐突にその評価を完全に転回する。

しかし、Benedictがそれらのhandicapにもかかわらず、日本文化のさまざまな面を、我々日本人の考えつかぬ道を通じて探り当てたことは確かである。⁹⁾

そこで、第二の「<日本人>の概念について」においてはベネディクトによって描かれる「日本文化のさまざまな面」についての肯定的評言が開陳されるのだろうと予想すると、その期待は裏切られることになる。二において展開されるのはベネディクトの使う「日本人」なる概念の不明確さについての議論である。南によれば「日本人」なる概念には三つ有り得るといふ。第一と第二はいずれも、一種の階級概念であって、一は日本人の中位を占める階層(日本の中産階級)を指す。二は多数を占める階層(日本人の労働者農民)を指す。三として「より抽象的な類型としての統計的日本人」がある。南によれば、これら三つのうちベネディクトの依拠しているのは三つ目の類型概念としての「日本人」、つまり超階級的、非現実的な構築物であるとする。そのような類型概念に依拠することを南は全面的に否定している訳ではない。だが、それが「固定的」「非歴史的」という「根本的な欠点を持っている」事が強調される。

「三 日本人の<二重性格>について」においても議論の展開スタイルは同様である。南は『菊と刀』は上のような欠陥にもかかわらず、日本人の多数が共通に持っている社会行動の諸傾向を抽出することに成功している」と始めに述べる。ところがこの章において彼が展開するのはその「成功」の具体例ではなくて、やはり前章迄と同じくベネディクトへの批判なのである。ここで彼が展開しているのは、ベネディクトに対するというよりもむしろ彼女に代表されるアメリカ社会人類学に対する批判だといってもよいかもしれない。彼が指摘するのは、第一に「飲酒」に代表されるような「自由の領域」は日本のみではなくアメリカにもあるということであり、第二は日本人の性格の二重構造をもたらしたとされる幼児期と大人との社会的規範の不連続性が、少なくとも彼女が例として挙げている「性」については成り立たないのではないかということである。

かくして、かれは最後に次のように結論することになる。

この意味でBenedictの「菊と刀」は、社会人類学が独力で近代社会の人間を分析するには力量が不足であり、他の隣接する社会諸科学の力を借りて初めてそれが可能であることをはっきり示して居る意味で教訓的である。⁹⁾

すなわち、「社会心理学者」南にはベネディクトの方法に対する疑いが根底にあり、それがこの

ほぼ全面的な批判となっているのである。だが、それらの内容とは別に、すでに何か所か引用したように、前後の脈絡を離れた『菊と刀』についての肯定的コメントが挟まれている。そのため、方法のレベルでも内容のレベルでもベネディクトの諸説は批判されているのだが、必ずしも全面否定ではないという印象を受ける。ただ、南がベネディクトの説のどの部分を「成功」とみなしているのか、少なくともこの議論だけからは分からない。

有賀喜左衛門は1987年生まれ、1949年から東京教育大学教授。1925年から柳田の雑誌『民族』の編集に協力。主な著書に『日本家族制度と小作制度』（1943）がある。彼はその議論の冒頭においてベネディクトは「日本人のメンタリティーの重要な点に触れて」おりそれは「アメリカの文化人類学のレベルの高いこと」によると書く。有賀は南や川島とは逆にベネディクトの議論の歴史性を高く評価する。それは、歴史学者が言うようなものとは違って、「現学立場」すなわち現在あるものを解釈するための一つの資料として過去の歴史的な事実を取り扱う立場である。それを、有賀は「史観」として高く評価する。すなわち南、川島らとは歴史性の定義が異なっているのである。ともかく有賀はそのような立場から、ベネディクトによる文化人類学の現代社会への適用の有効性についてまず第一に評価する。その場合にも「資料の検討が不充分であるために、その内容には誤りと思われる点や誇張せられた点もある」ということを指摘するのは忘れないのだが。

標題にもあるごとく有賀がベネディクトの議論の中で中心的な論点として取り出すのは階層制の問題である。彼はこの問題に関するベネディクトの議論を次の様にまとめる。すなわち日本社会はその政治、宗教、経済の各分野において「国家」と「民間」という二元性をもち、その国家のレベルに於ける「階層制」が日本社会の基本的な構造を規定している。このようなベネディクトの「階層制」理解に対して有賀はその説明を「曖昧」とする。すなわち、「階層制が全面的に存在するならば、それは二元性の介入する余地はある筈がない」からである。階層制が封建制期に成立し日本の「国家」システムに組み入れられたとするベネディクトに対して、有賀はむしろそれが「民族的特質」であって、日本における「氏族」のありかたにその根拠があるとする。そのあと彼の「階層制」についての理論の展開が始まるのだが、二全体のほぼ五分の四は彼の「階層制」についての議論に費やされている。ベネディクトそのものからはいささか遠ざかってしまった、この議論の中身についてここでは詳述を避ける。ここで有賀はベネディクトの説について議論するのではなくむしろそれを手掛かりとして自分の日本社会論を展開しているのである。

最後に三において有賀はベネディクトの義務並びに反対義務の一覧表をとりあげ、それを階層制の観点から整理し直している。このやや煩瑣で錯綜した表の、とりわけ「義務」「義理」の区分は極めて分かりにくいものであるが、これを身分の上下関係を含むものを「義務」とし含まないものを「義理」とするという処置を行ったうえで、その分類の欠陥を指摘している。ベネディクトに於ける（現実の日本語の語彙におけるではなく）「義理」「義務」「恩」の概念が上下関係を軸として編成されたものと考えことは極めて正当であり、このような処置を施した上でないと、この表はほとんど意味不明のものとなってしまふ。そしてここでも二と同じく階層制についての自説の展開が中心となる。したがってその最後が次のような言葉で結ばれのも不思議はない。

階層制の問題は余りに多くの問題を含んでいるので、この簡単な叙述でつくせるものではない。¹⁰⁾

という事になる。1950年というのは彼にとって、東大退官の翌年であり、『鎖国』執筆の年である。また翌々年(52年)には『日本倫理思想史』が書かれている。これらの事実を並べただけでも、2で取り上げた人々との立場の相違、とりわけ戦前の仕事からの継続性は明らかであろう。

和辻哲郎の「科学的価値に対する疑問」と題する論文は、ベネディクトの説に対する全面的な否定であるという点で、いささかこの特集の中で異彩を放っている。またその形式も、編集責任者でありこの特集の演出者でもあった石田英一郎に対する私信の形を取った「石田英一郎様」で始まる文章である。このような形式をとった理由については、この文章の始めに書かれているが、要するに「論ずるに値しない」という彼の価値判断をこのような文章の形式そのもので表現しようとしていたと推測される。そのいきさつについてはこの「手紙」にあるが、次のような事情であるようだ。

二ヶ月ほど前に石田英一郎が和辻に『菊と刀』の批評を依頼した。そのとき和辻は、まだ読んでいないし、読みたいという気も起こらない。だが、「貴君ほどの人が学問的価値を認められるものならば」読んでみましょうと答える。和辻は当然の事ながらこの本の内容についてうわさは聞いていた様であるが、それにも拘わらず、(いやそれゆえに)この本について論じること、そもそも読むことすら拒絶しようとしているのである。「自分はもう老先の短い身であるから、余生はできるだけ我儘に送りたい」と彼は言うが、これが一種の韜晦であるのは確かだろう。すなわち、和辻はこの『菊と刀』について自分の耳に入る「うわさ」からそれが自分にとって愉快的本ではないことをあらかじめ知っていて、それについて議論することを拒否しようとしたのだろう。

この拒絶の姿勢は、ベネディクトについて論じる和辻の論に一貫して貫かれている。そのいささか感情的とも言える和辻の言葉を幾つか上げてみる。

しかし、訳書を読み初めて間もなくわたくしは非常に後悔致しました。さうして長い間それを再び手に取り上げる気持ちが起こりませんでした。¹¹⁾

この書にもいろいろの価値がありませうが少なくとも学問的な価値だけはない、とわたくしには思へるのであります。¹²⁾

しかるに、著者は局部的な事実において直ちに全体の性格を見ているのであります。¹³⁾

このように、標題にある「科学的価値に対する疑問」が提示されて行くのである、その際、和辻が最も問題とするのはそのデータの恣意性と、「部分を持って全体を判断する」彼女の方法に対する疑問である。だがこの疑問の根拠が単に彼の学問的方法にベネディクトのそれが抵触したという事だけではないのは確かである。もし、それだけであつたらこのような感情の爆発は説明がつかない。

それは、ベネディクトの論の具体的な内容によると考える他はない。和辻は言う、ベネディクトは「日本人が西欧の戦時慣例に違反して行つたあらゆる行為が日本人の人生観を知り、人間の義務全般に関する日本人の信念を知る資料となつた」とするが、それは「一部の軍人」の行為にすぎず「日本人の大部分はさういふ違反行為をやつたものではありません。さういふ行為の行われてゐたことを確実に知っていたわけでもない」。つまりさきにあげた「部分」とは「第二次世界大戦中の日本軍人の行動」であり、「全体」とは「日本人すべて」である。彼の論旨は、ベネディクトが取り上げている日本人の特徴は「最近十幾年の間に著しく目立つた軍部のイデオロギー」にすぎないという事である。そのような観点からベネディクトが日本人の精神構造の特質として挙げている「精神力で物質力に勝つ」とか、「各得其所」などというのはなんら日本人の本質的なものの考え方ではないと『菊と刀』の内容を批判する。

この和辻の批判に対して、西義之は「ひどく感情的」と評し、副田義也は和辻が『菊と刀』を全部読んだかさえ疑問であるという。¹⁴ 事実、和辻のこの批判はある意味でそれ自身が「科学的価値」を疑われても仕方のないものである。和辻のこのような感情的反発の意味は後段で検討するとして、ここではそれなら彼は日本文化についてどのように考えているのかということを確認しておこう。彼が最後に描き出す日本文化のイメージは極めて近代主義的なものである。つまり日本人（つまり自分）には階層制への信頼などなく、当時の青年達の大部分は「自分の意志で」職業や妻を選び家の規制が甚だしかったのは「古風な家庭」にすぎない。「嫁いびり」どころか、今一般的なのは「嫁にいじめられた」姑である云々。

こうして、和辻は最後にこう結ぶのである。

わたくしは、この書のどこに学問的価値があるかを、民族学者として貴君に教へて頂きたいとおもひます。それを、わたくしは繰り返して要求します。¹⁵

日本民俗学の創始者柳田国男についてはもはや、多くの言葉を費やす必要はないかも知れない。彼が1950年には75才であったこと、前年に日本民俗学会の初代会長になっていること、51年に文化勲章を受賞していることだけを確認しておこう。

彼の「尋常人の人生観」は、始めにベネディクトの議論の前提である「環境の変化や時の力だけでは、改めやうのない」文化型の概念についての疑問をまず表明する。そして、彼が特に中心的に論じるのが「恥の文化」「罪の文化」の問題である。柳田によれば、ベネディクトの説とは異なって、日本人にとって「罪」の概念は古くから重要な役割を果たして来た。そしてそれは何ら信仰上の背景をもたぬものではない。仏教に起源を持つ「輪廻転生」の概念は、これもベネディクトの説とは異なって、かなり深く日本人の意識の中に浸透していたという。

更に、柳田によれば、日本における恥の文化は「笑い」との関係によって特徴づけられる。すなわち、「日本で『恥』といったのは、笑はれることであつた。」だが、このような「笑われること」に対する恐れは、当初武士階級に固有のものであって、それがより広範な社会層に浸透するにはさらに時間が掛かったという。つまりこの「恥」の感覚は歴史的にはむしろ新しいものであるという。とすれば、この「恥の文化」を、より古い根柢を持つ「罪の文化」と同一の地平で論じることはできないというのが柳田の「罪と恥」について主張なのである。

つづいて、彼はベネディクトの方法上の限界を指摘する。その場合彼の立場は、「文化型」の概念そのものを否定したり、彼女が集めた材料の恣意性を単純に指摘するという所には無い。柳田が強調するのは、文化型の概念はその存在がまだ証明されていないのだから、それを証明するには更に時間が必要であるという事なのである。そして、このような未証明の結論に対して、それが外国人によって唱えられているというだけで持て囃す、日本人の事大主義に対して批判を加える。このように『菊と刀』に対する評価としては、極めて厳しいものであるが、この柳田の議論からは和辻のそのような一種の「憎しみ」は感じられない。それは柳田がこのベネディクトの議論を単純に批判するのではなく、それらの（柳田からすると）「誤り」がどのような経緯で生じ、そこから何が生み出し得るかを考えようとしているからである。

そのような観点から、つづいて柳田が指摘するのは、これまで日本人が外国に対して、自国の文化をきちんと説明しないで来たということである。具体的には武士道やそれに付随した復讐の慣習が、日本人全体に共通したものではないとする。そのあと「有り難う」「気の毒」「すみません」「義理」「恩」といった言葉に対するベネディクトの誤解を指摘したあと、最後に柳田がそれまでの議論の筋道と離れて「たつた一つだけ是からももち続けて居たい問題」として挙げるのは、ベネディ

クトのいう typical Japanese boredom である。すなわち、日本人の「あきらめのよさ」の根拠を、例えば、飲酒の習慣や、隠遁の風習との関連で指摘する。そして最後に柳田は、「文化の科学」に携わるものが、「日本はどうなつて行くか、又どう変わって行くことを希望すべきか」について考える必要性と、そのための「確かな」事実の集積の重要性について説く。ベネディクトの仕事も彼はそのようなものとして捕らえ、そしてそのための手掛かりとして評価、批判を行っていることがこうして明らかになる。

4

ここまで見て来たような、『民族学研究』の特集の5人の筆者たちのベネディクト説に対する賛否は、単純に世代の問題へと還元することはできない。だが、戦後の言論界、学界で新たに仕事を始めようとしていた人々と、戦前との連続性の中で仕事を継続しようとした人々との間にはその主張に微妙な相違がある。一方、そこには終戦直後という、語られた時点での日付が共通に刻印されてもいる。

まず共通点である。それは第一に、第二次世界大戦という「破局」に対する、極めて深刻な悔恨である。

私は、我々の心を完膚なきまでにたたきつけ痛み^{ママ}付けたあの敗戦の直後に、本書を一読したときの深い感銘を忘れることができない。(川島)¹⁶⁾

ベネディクトに対して正反対の評価を加える和辻においてもそれは同じなのである。

少数の人々の偏狭な考えが日本人の考へとして云ひ現はされ、さうしてそれが日本の国家の行動として実現されました。¹⁷⁾

このような、過去に対する慚愧の念は、「戦前」と「戦後」を、つまりは「過去」と「現在」の心理的連続性を断ち切ろうとする契機となるものである。したがって、「現在」は極めて重要なものとなるだろう。

現在とは厳密に見れば瞬間であるから、これは過去と未来との媒介者である。この事は現在は常に過去と相互規定し、また未来とも相互規定する関係にある事を示すから、この瞬間は歴史的意味を持つ。(有賀)¹⁸⁾

「現在」という瞬間の重要性は、どのような時代にも言えることである、だが、この時点では「現在」が特権的な歴史性を付与されたものとして認識されていた。それは、未来へとつながる時間としてである。過去との断絶が強調される一方で、「現在」と「未来」とは連続したものとして認識される。

それ(文化の型というものが存在するかどうかということ—引用者)は、将来の再建計画を条件づけるといふだけでは無く、國が自らの存在を意識する上にも、時としては煩はしい障碍となるかも知れぬからである。(柳田)¹⁹⁾

すなわち、これらの議論は単に「学界」という閉じた世界において展開されているのではなく、現実の政治過程と深くかかわった問題として論じられる。このような狭義の政治との関わりが「日本文化論」の流れの中で必ずしも特異な現象ではないことは、始めに確認した。戦後日本の改革に対する希望は、経世済民を目指した柳田のみに固有の傾向ではなく、他の論者の場合にも現れている。

しかし、democracyの成長の為にこの条件が克服されて、個人生活が確立しなければならないという事は確かであろう。（有賀）²⁰⁾

それ（日本文化の型を動的なものとしてとらえ直すこと—引用者）は、占領のために必要であるかどうかよりもいまや我々日本人に取っては、民主主義革命を遂行し、日本を再建設し、我々の歴史を作るために必要である。（川島）²¹⁾

この様に見て来るとき、やや特異な位置にあるのが南博の論である。この、戦後に自らの言論活動を開始した論者によるベネディクトに対するかなり辛辣な批判は、どのように位置付けるべきであろうか。この論文を『『菊と刀』批判』の題で『社会心理学の性格と課題』（勁草書房、1963年）に収めるに際して、南は当時の時代状況について、同書の「戦後日本の社会心理学」という論文を参照するように最後に付け加えている。その論文のなかで彼は、戦後の社会心理学を四つの時期に区分しているが、『菊と刀』についての論文が書かれたのは第一期（1946～50）の「アメリカ社会心理学の移入、紹介」期と説明されている時期に当たる。南の言う「時代状況」とは「日本文化」をめぐる時代状況ではなく、社会心理学という移入学問をめぐる状況なのである。すなわち、南の『菊と刀』に関する議論はアメリカ社会心理学の移入定着という目的意識に貫かれており、むしろ『菊と刀』はそのような戦略の一つの素材に過ぎない。だが46年に始まるこの（南が言うところの）第一期の課題がアメリカから一つの学問体系を移入することであったとすれば、それは、過去の日本国内の学問との意識上の断絶を意味していた。

ところで、このような「移入学問」に対する態度という点については世代の相違が、かなりはっきり影響を与えているように思われる。旧世代に属する柳田が「諸外国の通説だときまったら遵奉する者」に対する警告を何度も繰り返しているのに対して、南と同世代の川島は戦争中からLederer, Viallis, Hern, Löwitt, の日本論を読み耽った事を述べ、更にこの文章を1972年に『定訳、菊と刀』（長谷川松治訳、社会思想社）に収録するに際しては、この四名にBasil.H.Chamberlainの名を付け加えている。このように、自らの日本文化についての議論を、戦前からの議論の延長上に組み立てるのか、それともそれとは断絶して移入学問のうえに打ち立てるのかということは、世代を分かち一つの分水嶺なのである。

このことによって、和辻の論をどう位置付けるかも明らかになる。和辻にあっては過去への反省がそれとの断絶をもたらしてはいない。すなわち戦争を引き起こしたのが「一部の軍人」であって、その時代の価値観がそれまでの「本来の」価値観と切り離された特殊なものであるとすれば、彼は意識の上でその短い時代を飛び越えて、それ以前の良き時代と連続した感覚を維持することができる。このような和辻の立場は、一見同じように過去との精神的な紐帯を失っていない柳田の場合と比較してみるとはっきりする。柳田において、改革すべきものは単なる一過性のもので、現代になって突然現れたものでも無く、一定の歴史的根柢を持つ根強いものと考えられている点が和辻とは異なっている。彼が過去との精神的紐帯を維持しているのは、彼が「持続する現在」を生きるからであって、敗戦に始まる「そのときそのときの現在」はその中に含まれてしまう。一方、和

辻は敗戦を出発点とする「現在」に対して、彼にとっての「我々の現在」を対置しようとする。だが、その内容はいわゆる「大正デモクラシー期」のいささか色あせた名残に過ぎない。

そして、未来に向ける視点という点では和辻のそれは他の人々とは全く異なっている。すなわち、和辻は現在を過去と断絶し未来につながるものとしてとらえるという他の人々の持っている時間意識を共有していない。それは、同時に彼がこのような時間意識を共有した戦後の議論の枠組を拒絶しているということにほかならない。まさに彼の極めて感情的なベネディクト批判はこのような拒絶の結果なのである。

ここまで見て来たような時間の感覚と、それぞれの議論の構成とは深く結び付いている。和辻の反発についてはすでに触れた。南と和辻を除く3人においては、ベネディクトの説に対する批判は、未来の変革可能性と結び付いている。例えば、川島はベネディクトに於ける歴史性の欠如を指摘する。それは、何よりも次のような視点からなのである。

少なくとも、現在の日本のように変革との動的な過程の中にある社会を観察し分析するにあたっては、歴史的な考慮なしにはその科学的分析は極めて不十分なものとなるのではないであろうか。²²⁾

川島が『菊と刀』に全面肯定に近い賛辞を送るのは、彼自身の「民主主義革命を遂行し、日本を再建設し、我々の歴史をつくる」というプログラムの中で、このようなベネディクトの主張が一定の機能を果たし得るからにはほかならない。つまり、日本の改革を有効に進めるためには、それまでの日本社会の欠点がドラスティックに指摘されなければならなかった。とすれば、そのような過去の日本についての否定の契機を与えるものとして『菊と刀』は意味をもっていたのである。したがって、このような日本社会の欠点が改変不能なものであっては川島の議論は成立しなくなってしまう。歴史性や多様性の指摘はこの社会の改革可能性を保証するものとしての意義をもっているのである。

有賀に於ける、「階層制」が単に政治的なものではなく社会的な根拠をもつという主張も、「今日上下関係を打破する政策の為に平等関係は非常に多く現れたが、その部分に於いてのみ階層制がかくれているに過ぎないから、これを規定する条件が変化すると、又上下の階層制に転換する可能性を持つものである」という、変革の「困難さ」の認識に基づいている。

柳田が主張する、日本文化に於ける「恥」に対する本質的な「罪」の優位も同様である。それは、単なる事実の指摘ではなく、我々日本人が普遍的な価値規範をもち得ることの保証であり、過去の伝統に依拠することによって未来の方向性を根拠づけようとする彼の戦略の現れなのである。「恩」や「義理」の観念が「十分な体験を重ねず、用法のまだ安定」しない観念であるという場合にも、これらの観念の背後にある社会関係の流動性がこのような主張を裏付けるものとして提出されているのである。最後に唐突に現れる typical Japanese boredom の指摘もそのような変革の主体たるべき日本人の受動性に対する危惧の念の現れと考えられるだろう。

そのように見るならば、それらの時事的な話題をほとんど含まない南の論も時代の刻印を受けていると言える。たとえば、ベネディクトの論における歴史性の不在の指摘は、川島と同様である。「日本人」という観念が、固定的であると批判するのは、「日本人」の内実の多様性や流動性が「日本文化のさまざまな(否定的な)面」を乗り越える可能性を示すものであるからだ。とすれば、ベネディクトの方法に対する「社会心理学」の優位もそのような「変革の学」としての有効性の主張としても読むことができる。

以上見て来たように、戦中までの日本文化に関する議論の枠組を離れて、新しく議論を始めようとする人々は、その議論の根拠を移入学問に求めていた。それは、川島にあってはベネディクトで

あり、南にとっては社会心理学であった。一方より古い世代に属する柳田と和辻、及び中間の世代に属する有賀は戦前からの議論の枠組を崩していない。だが、柳田と有賀が自らの理論枠組の中に戦後を出発点とする時代意識を取り込んだ(それは、同時にベネディクトの議論を取り込んだという事でもある)のに対し、和辻は基本的にそうすることに失敗したのである。

『菊と刀』がその出発点において果たした役割は、それまでの日本社会の否定的要素を摘出することであった。それが、以上五人の論者も含む読者に対してもっていた意味はそれ以前の時間との断絶の実現であった。こうして、さまざまな日本文化論が以後この枠の中で展開されることになる。そこで中心となって行くのは、まず、南や川島のように敗戦を自らの議論の出発点とした人々である。戦前の議論との連続性は当初あまり顧みられない。例えば、作田啓一は『「恥の文化」再考』において柳田の「笑い」に関する論に言及するけれども、彼が日本文化における罪の優位を主張したことには触れない。また、和辻が『菊と刀』について論じていることについても、その文章が『全集』に収録されていることすら忘れられているほどである。²⁰⁾だが、こうして形成された否定すべき日本人像は、以後、時間の経過とともに日本人の自己意識の変化に伴って変化していくことになる。その背後にあるのは、一つは高度成長の実現であり、もう一つは「敗戦」を「現在」の出発点としようとする時代意識の風化である。いずれにせよ、それはベネディクトに対する評価の変化とともに、いったんは断絶した大戦までの日本人論との、例えば柳田の論との、連続性の回復をもたらずはすである。だが、そのプロセスの詳細な検討はすでに本稿のテーマを越えている。

注

1) ヘルマン・ハイネベル(1901~1988)は、「現在」を四つのカテゴリーに分類している(「そのときそのときの現在」「持続する現在」「一回限りの現在」「我々の現在」)。その第一の「そのときそのときの現在」の始まりを画するものとして、「本質的な出来事」「破局」「革命」「生きる者の経験」という四つを挙げている。

ハイネベル(阿部謹也訳)『人間とその現在』未来社、1991、14ページ以下参照。

2) とはいえ、この時期に展開された議論のすべてが『菊と刀』の影響下に書かれたという訳ではない。

3) これに先立って、雑誌『知性』が1948年に鶴見和子らを執筆者に『菊と刀』の特集を行っている。

4) A4版83ページのうち特集の5論文は35ページを占める。特集の中間あたり(南論文のおわりの箇所)と最後にそれぞれ二冊ずつの本の広告が出ている。初めの二冊は石田英一郎『民族学の基本問題』(北隆館)とベネディクト(尾高京子訳)『文化の諸様式』(中央公論社)である。いずれも新刊書である。後ろの二冊はベネディクト(長谷川松治訳)『菊と刀—日本文化の型—』(社会思想研究会出版部)、ベネディクト(志村義雄訳)『民族—その科学と政治性』(北隆館)である。

5) 青木保『「日本文化論」の変容』、中央公論社、1990、31ページ

6) 都築勉『戦後日本の知識人』(世織書房、1995)は「敗戦直後から旺盛な知的活動を展開した知識人たちが1905年から15年までに生まれた、同一世代に属する人々であることを指摘し、このような世代論が戦後の思想状況を理解するのに有効であると主張する。

7) 『民族学研究』第14巻4号(1950年5月)、263ページ

8) 同上、272ページ

9) 同上、274ページ

10) 同上、284ページ

11) 同上、285ページ

12) 同上、285ページ

13) 同上285ページ

14) 西義之『新・「菊と刀」の読み方』、PHP研究所、1983、26ページ。副田義也『日本文化試論』、新曜社、1993、54~55ページ

15) 『民族学研究』289ページ

- 16) 同上、263ページ
- 17) 同上、288ページ
- 18) 同上、276ページ
- 19) 同上、290ページ
- 20) 同上、284ページ
- 21) 同上、270ページ
- 22) 同上、269ページ
- 23) このことに関しては、副田義也『日本文化試論』52ページ以下参照。

平成7年(1995)年9月30日受理

平成7年(1995)年12月25日発行